
‘ 死 ’ のドッジボール

martini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

‘死’のドッジボール

【Nコード】

N9037E

【作者名】

martini

【あらすじ】

帝丹小学校で行われることになっていたドッジボール大会・・・楽しくなるはずだったドッジボール大会・・・しかし、楽しくなるはずだったドッジボール大会は、命を懸けた戦いに急変化！コナン達は、その戦いを制し、生き残ることができるのか？！

第1話 これはまだ、ほんの序章に過ぎなかった・・・（前書き）

これは死にネタ的なものです。

死にネタ的なものが苦手な方は、見ないほうが無難かと思います。

第1話 これはまだ、ほんの序章に過ぎなかった・・・

今日は年に一度のドッジボール大会だ。

皆、ドキドキしながらも、優勝を目指し、頑張っていた。

「あゝ、今日はドッジボール大会かあ。かつたり・・・んなの何回もやってるっての・・・ドッジボールの何が楽しいんだよ・・・」

「あら、『普通』の小学生なら喜ぶはずよ？」

「あのなあゝ。俺は本当は高校生だぞ？んなのやってられるかよ・・・」

3

と言う会話をしているのは、工藤新一こと、江戸川コナン。

それと、宮野志保こと、灰原哀だ。

「コナン君！哀ちゃん！早く行こつよ。遅れちゃうよ？」

「悪い、悪い。ちょっとな。じゃあ行くぞ、灰原。」

「ええ。」

コナン達は、ドッジボール大会が行われる運動場に向かった。

「おせーぞ、灰原、コナン！」

「すまねえな。もう始まる。並ぼうぜ。」

ザワザワ。

「ん？妙にあそこ、人が多くないか？」

「あそこは、ルールが書いてあるところですね。」

「ちょうど、見に行きたかったし、行こう！」

「そうね。」

コナン達は、その場所に向かい、子供たちの間を潜り抜け、皆が見ているルール表を見た。

「な、何だ、これ？！」

「どういうこと？！」

ルール表には、こう書いてあった。

『死』のドッジボールの説明。

1 ・ボールに当たったら死ぬ。

2 ・外野は3人まで。

3 ・コート外に出ても、死ぬ。

4 ・参加する組の保護者も参加。

5 ・家族の内、一人でも当たると、家族全員が死ぬ。

6 ・死んだ人数の多い組は、当たった、当たってないに構わず、全員が死ぬ。」

皆が騒いでいた原因は、これだった。

「これ、俺達も出るんだよなあ・・・？」

「あ、ああ・・・」

さすがのコナンも、顔をこわばらせている。

すると、一人の女が朝礼台に立った・・・

第1話 これはまだ、ほんの序章に過ぎなかった・・・（後書き）

はじめまして。溜々香です。

下手な小説だと思います。

でも、完結できるようにがんばります！

第2話 ‘死’のドッジボール、開始！！

「だ、誰だ、あの女！！」

元太がその女を指差した。

女は、ふっと笑うと、話し出した。

「フフフツ・・・これは、私が書いたルールよ。その通りになるわ。そのルールに従わないと、あの世で後悔するはめになるわよ。さあ、始めましょう・・・恐怖の戦い、‘死’のドッジボールをね！第1戦は・・・1年B組VS1年F組よ。さあ、コートに入って。子供たちの保護者もね。」

「コナン君。頑張りましょう。生きるために。」

蘭は、じっと、コナンを見た。

「うん！絶対！」

そう答えるコナンだが、心の中はそんな感じではなかった。

このままだと、いつか死んでしまう・・・

そんな恐怖を持っていた。

きっと蘭もそうだろう。

「はあい！クールキッド！」

「じよ、ジョディ先生？！」

「久しぶりだな、ボウヤ。」

「あ、赤井さん？！」

「ごめんよ、急に来て。」

「ジェームズさん！ど、どうしてここに・・・？」

コナンは、来ると思っていなかった人たちがここに来ていて、驚いた。

コナンは声を小さくして、ジョディたちに言った。

「ねえ、赤井さんたちは大丈夫なの？」

「大丈夫。似てるんだって、言つて、名前も変えておいたから。」

「（て、手際いいなあ、FBIは・・・）」

コナンは本心でそう思った。

「コナン君！行きましょう！」

蘭の言葉に続き、歩美達が言う。

「行くぜ、コナン！」

「絶対に生きて家に帰ろうね！皆揃って！」

「早く来てください、コナン君！」

「このままじゃ死ぬわよ？」

「おう！分かってるって！」

そして、少年探偵団＋哀、コナンが声を合わせた。

『絶対に生きて家に帰るぞ！おおー！！』

「頑張ろう、コナン君！」

「おう！！」

皆はダダダッと走ってコートに入った。

「シュウ。ボス。私たちも・・・」

「そうだな。」

「行こう。」

そして、ジョディたちもコートに入った。

女は皆がコートに入ったのを確かめると、

「さあ、**死**のドッジボール、開始!!」

そして、**死**のドッジボールが始まった!!

第2話 ‘死’のドッジボール、開始！！（後書き）

やっと第2話です！

頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！

第3話 血でまみれたドッジボール（前書き）

ここでは、血、が出てきます。

血、が苦手な方は見ないほうが無難だと思います。

第3話 血でまみれたドッジボール

「死」のドッジボールが開始された。

皆、命がけなので頑張っている。

「あつ、そうだわ・・・ストップ!!」

女は、パンパンと手をたたいた。

「制限時間は30分。分かったわね?じゃあ、試合続行!」

試合が続行された。

「きゃあ!!」

1年F組の女子が、ボールに当たった。

「桃花ちゃん!!」

歩美が叫んだ。

すると、桃花と、その家族の下に、黒い穴ができた。

黒い穴は、桃花と家族を吸い込んでいく。

「きゃあああああ！！！」

体の肉が切れる音が聞こえたかと思うと、ひと際大きい音が聞こえた。

ザンッ！！

すると、穴から大量の血が出てきた。

それは、コナン達にかかった。

「きゃあ！血だわ！」

「くそっ！こうなる前に終わらせるぜ！」

ボールは、1年B組の、コナンの手に渡っていた。

「1年F組、藤堂桃花^{とうどう ももか}、死亡。」

女は冷酷に言った。

顔には笑みが浮かんでいる。

「・・・しょうがねえな。はっ!!」

コナンがボールを投げた。

「うわあ!!」

ボールは、相手の男子に当たった。

「隆太^{りゅうた}!!」

元太が叫ぶ。

「いやだ・・・いやだあ！！死にたくないよお！！！」

「いやよ！あたしだって・・・死にたくないわあ！！！」

隆太の家族は皆、泣き叫んだ。

そして、桃花同様、黒い穴に吸い込まれた。

隆太は家族が多いため、桃花以上に血があふれ出てきた。

「きゃっ！」

「くそっ！」

「1年F組、古石^{ふるいし}隆太^{りゅうた}、死亡。」

女はそう言ったあと、時計を見た。

ピピーー！！

笛が運動場に鳴り響く。

「試合終了。勝者、1年B組。」

女がそういった瞬間、一年F組のコートに大きな穴ができた。

「百合香ちゃん!!」

「春川さん!」

「良太!!」

「勇樹君!!」

「修一!!!!」

コナン達は友達の名をいう。

しかし、答える間もなく1年F組の皆は穴に落ちていった。

大量の血が、コナン達に降り注いだ。

「まるで・・・火の・・・あ・・・め・・・」

誰が言ったか分からない。

皆はバタツと倒れた。

さすがのコナンも、これには耐えられなかったらしい。

目の前が真っ白になり、やがて意識を失った。

第3話 血でまみれたドッジボール（後書き）

ここから先、どう書こうか迷ってます・・・

でも、頑張ります！

この話で、『まるで・・・火の・・・』とありますが正しくは、『まるで・・・血の・・・』です。

申し訳ございませんでした。

第4話 託された思い

皆が倒れて1時間後。

「ん・・・？」

コナンが目を覚ました。

「コナン君！よかった、起きましたね。」

コナンはきよろきよると、周りを見渡した。

どうやら、コナンが最後だったらしい。

「ウフフ・・・全員起きたわね。」

「あっ・・・お前は!!」

そこには、審判をやっていた女が立っていた。

「あたしの名前は、阿呪^{あじゆ}よ。覚えなさい。」

「阿呪・・・？」

言ったのは、コナンだった。

阿呪はフツと笑い、テレビを指差した。

「フツ・・・ごらんなさい、テレビを。この‘死’のドッジボールの事は、今や日本中に広まったのよ。ウフフ・・・」

阿呪が指差したテレビは、リモコンも触っていないのに、勝手に付いた。

「あつ・・・見て!!」

ジヨディが黒い穴を指差した。

「あつ・・・!」

分からなかった。

人がどうして穴の中で死んだのか。

上からじゃないと見えなかったのだが、中にある、鋭利えいりなナイフが、落ちてきた子供と、その家族を切り刻んでいたのだ。

「ウフフ・・・どう？驚いたでしょう・・・？次の第2試合は、もっと残酷よ。」

阿呪は、人形を取り出し、床に置いた。

「人形をよく見なさい。これが第2試合で当たった時の穴の中の様子。」

すると、人形の首にナイフがささった。

次に目。

次に口。

次に鼻。

そして、同時に頭と左胸に刺さった。

「そして、第3試合が・・・」

「もうわかった。これ以上に残酷なんだろう？見たくもない・・・」

阿呪の言葉を遮ったのは、赤井だった。

「ウフフ・・・そうよねえ・・・」

阿呪は、時計を見た。

「さあ、第2試合の始まりよ。急ぎなさい・・・」

阿呪はそういうと、スーッと消えていった。

「急ぎましょ！」

蘭の言葉をスタートに、皆は運動場へ向けてダッシュした。

「集まったようね・・・それでは、1年B組VS1年C組の戦いを始めるわ。スタート!」

阿呪の声で一斉に声上がる。

「きゃあ!」

「うわあ!」

当たっているのは、1年C組のクラスだけだ。しかし・・・

「きゃあー!!」

とうとう、1年B組にも、犠牲者が出た。しかし、それは・・・

「ジョディ先生?!」

そう、ジョディだったのだ!

「・・・しょうがないわね・・・当たってしまったんですもの・・・」

ジョディは、いつになく冷静だった。

「おい!何でそんな冷静にいれるんだ?!」

赤井は不思議でたまらなかった。

それは、皆も同じだった。

「だって・・・騒いでも死ぬのは一緒じゃない。だったら最後ぐらい静かにいたいわ。」

「ウフフ・・・さすがだね。じゃあこうしましょう。」

「何だ？」

コナンは完全に新一に戻っていた。

「ウフフ・・・江戸川コナン。赤石龍^{あかいし りゅう}。あなたたちが最後の最後まで生き残って、優勝すれば、死んだ皆を生き返らせてあげる。でも・・・生き残れるかしら？どちらか1人でも生き残ればいいわ。ウフフ・・・」

「つまり・・・俺達二人と勝負・・・ということだな？！」

「ええ、その通りよ。ウフフ・・・」

コナンの問いに、阿呪は即答した。

赤井とコナンはすぐに分かった。

必ず罫を張っているはず、と。

人が死ぬのを楽しんでいる奴が、こんなことを言うといつことは、必ず、だ。

そして、赤井とコナンは同時に叫んだ。

『いいだろう！その勝負・・・受けてやる！！』

「ウフフ・・・」

そして、ジョディの下に黒い穴が出てきた。

「シュウ！コナン君！絶対・・・生き返らせてね！」

ジョディは、赤井が「龍」ということも忘れていた。

「ああ！必ず・・・だ！！」

「待っててね、ジョディ先生！！」

そして、黒い穴から、血があふれてきた。

「必ず・・・だ。」

「赤・・・石さん！頑張ろうね！！」

「ああ！！」

全てはコナンと赤井に託された。

ピピー！！

笛が鳴り響いた。

「勝者、1年B組。」

そして、第1試合同様、相手は黒い穴に落ちていった。

最後に、1年C組の一人、たかはし さくら高橋桜は叫んだ。

「おにいちゃん！江戸川君！！絶対に・・・生き返らせてね！託したよー！！」

と。

「ああ！任しとけ！！」

コナンは限界の声を出した。

そして、血があふれだしてきた。

赤井と、コナン、そしてジェイムズ以外は、気を失った。

皆は、気を失う前に願った。

『絶対に、死んだ皆を生き返らせて・・・』

と。

そして・・・

コナンと赤井は心に強く誓った。

『必ず、生き残って優勝して、皆を生き返らせる・・・』

と・・・

第4話 託された思い（後書き）

登場人物を書くの、忘れてました。

帝丹小学校の子供達。（少年探偵団＋哀、コナン。）

毛利蘭。

ジヨディ・スターリング。

赤石龍こと、赤井秀一。

フラン・ブラックこと、ジェイムズ・ブラック。

阿呪。

子供達の親。

これぐらいだったと思います。

ジェイムズの偽名、書かなくてごめんなさい。

蘭の親は、出かけていていません。

第5話 固い約束、一致団結

2時間後。

皆が起きた。

起きた瞬間。歩美がコナンに言った。

「コナン君！あのね・・・ドッジボールをやつてるときに皆で考えただけど・・・」

光彦が、言葉に続いた。

「僕たちの事は放っておいて、優勝することだけを考えてください！」

「ええ？！お、オメーら、何考えて・・・」

コナンは、歩美達が言っている意味が分からなかった。

「あたしたち、考えたのよ。赤石さん、江戸川君・・・どちらかが

生き残り、優勝できたら、死んだ皆は生き返る・・・だったら、勝つためならあたしたちを当ててもいいわ。もし阿呪が何か考えているとしたら、きっと仲間を半分に分けるか、赤石さんと江戸川君の二人のチームを作るかのどちらか。可能性は、赤石さんと江戸川君の二人のチームのほうが高いわ。だから、あたしたちを当てていて。あたしたちは動かないわ。これで・・・どうかしら？あなたたちが勝てば、また生き返れるの。どう？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

二人は黙ったままだった。

「コナン！優勝すれば、俺達はまた生き返れるんだぜ！どっちにしろ、生きることになる！だから、いいだろ？」

「・・・分かった。頑張るよ。」

コナンは承知した。

「赤石さん。いいよね？」

「・・・ああ。」

赤井も同意した。

「約束だよ？絶対だよ？守ってよ?!」

「分かってる。絶対・・・な？」

「始まるわよ・・・早く来なさい。」

阿呪が言った。

今さっき来たらしい。

「分かってるっての！行くぜ、皆!」

そして、子供達全員の言葉が重なった。

『死んだ皆を生き返らせるぞ！おおー!』

「行くぜ!!」

そして、運動場へと向かった。

「1年B組VS1年G組の試合、開始!!」

阿呪は未だに笑っている。

「はっ!!」

次々と1年B組は、相手の1年G組を当てていく。

1年B組は一人も当たっていない。

「ウフフ・・・おもしろいわねえ。人が死ぬ所を見るのは。こんな戦いが好きなのよねえ。」

阿呪は、不^ぶ気^き味に笑った。

ピピー！！

「勝者、1年B組。」

1年G組は、穴に落ちていった。

血が大量にあふれ出た。

しかし、慣れてしまったのだろうか？

皆は倒れなかった。

「次は1年A組よ。そのあとに、もう一度あるわ。ウフフ・・・優

勝できるかしら。」

「勝ってみせるわ！あなたみたいな人には負けない！！」

「そうね。この世にこんな最低な人間がいるとは思わなかったわ。」

「・・・！（にん・・・げん・・・？本当にそうか？）」

コナンはおかしい、と思った。

哀の『人間』という言葉が引っ掛かったのだ。

「（人間が・・・あんなものを用意できるか？それも当たった人だけ落とすなんて・・・絶対にできない！・・・となれば、こいつは・・・霊？）」

「お前・・・人間じゃないな？！」

コナンの言葉に、阿呪はフツと笑った。

「その通り。あたしは、あなたたちで言う幽霊さ。ウフフ・・・生

きてるとき、いろんな人を殺してきた。面白かったよ・・・だから、今度はこういう「ゲーム」を死の戦いにしたくなったのさ。ウフフ・・・」

「・・・つぎけるな！！人を殺すことがどれほど重いことが、分かっているのか？！」

「何でそんなに怒るのよ？おもしろいじゃない。」

「・・・っ！この勝負・・・絶対に勝ってみせる！もう許せねえ！
！覚悟しろ！！」

「ウフフ・・・勝てるものなら勝ってみなさい。」

阿呪とコナンはにらみ合った。

「少し休んだら？ウフフ・・・」

「フッ。そうさせてもらっぜ・・・！」

阿呪はコナンの返事を聞くと、スッと消えた。

そしてコナンは、近くにいた、赤井ですら聞こえるか聞こえないかの声で吐いた。

「ふざけるな・・・必ずこの勝負・・・勝たなきゃならねえ・・・必ず・・・!」

「ねえ!一緒に一致団結しない?親も一緒に!」

「それはいいですね!そうしましょう!いいですか?皆さん。」

皆は同時に答えた。

『もちろん!』

「じゃあやりましたよ。・・・絶対この勝負に勝つぞ!」

『おおー!!--!』

「コナン君!赤石さん!がんばってね!」

「ああ！任しとけ！！」

コナンが答えた後、赤井がコナンの肩をトントン、と叩いた。

「どうしたの？」

コナンはとりあえず、小さな声で言った。

「ボウヤ。絶対に勝とうな？この勝負に。」

「分かってる！最初から負ける気なんかさらさらないさ！」

「フッ。」

こうして、皆は一致団結した。

しかし、まだコナン達は知らなかった。

次に起きる、最悪の事態の事を・・・

第5話 固い約束、一致団結（後書き）

できれば、評価をお願いしたいです。

それをもとにがんばっていききたいので・・・

よろしくお願いします！

第6話 犠牲者の願い・・・

「試合・・・開始。」

阿呪の冷酷な声が皆の心に響く。

ボールはコナンの手にある。

1年A組の誰を狙うかを決めているコナンは気がついた。

「何で相手は動かないんだ・・・?!」

そう。相手は全然動かないのだ。

「皆、あなたたちに優勝してほしいのよ。教えてあげたわ。江戸川君と赤石さんが優勝すれば生き返れるんだって。だから、わざと負けるほうを選んだのよ。」

「ん・・・分かった!」

コナンはボールを投げた。

「きゃっ!」

「瑠璃ちゃん!ごめんね、瑠璃ちゃん!」

歩美が叫ぶ。

「いいよ!江戸川君か赤石さんのどちらかが生き残って優勝すれば、また生き返れるんでしょ?だったら、賭けるよ、江戸川君と赤石さんに!」

そして、瑠璃とその家族は、穴に落ちていった。

「1年A組、春西瑠璃^{はるにしるり}、死亡。」

阿呪は冷酷な笑みを浮かべた。

「くっ……あの女……人が死ぬのを笑ってやがる……狂ってるぜ!」

「ウフフ……あたしは人が死ぬ所を見るのが大好きなの……」

フッフ・・・」

阿呪は、また冷酷な笑みを浮かべた。

「えい！」

ボールが渡ってきた歩美は、適当にボールを投げた。

「きゃあ！」

「怜子！」

「あつ・・・怜子ちゃん！」

怜子は、皆同様、黒い穴に落ちていった。

「1年A組、井上玲子^{いのうえ れいこ}、死亡。」

「よくも怜子を・・・」

「古井君……？」

「許さねえ……！」

「ちょっと待てよ、良太郎！また生き返るって……なっ？」

しかし、良太郎はコナンの言葉を聞いてはいなかった。

「許さねえ……！」

「そうか……あの良太郎とやら……怜子とかいう女の子が好きだったんだな……」

「大丈夫だって！おい、聞いているのか、良太郎……！」

良太郎は、一言もコナンの言葉を聞いてはいなかった。

「よくも……！」

良太郎は自分の目の前に転がってきたボールを持つと、ものすごいスピードでボールを投げた。

「きゃあ!」

「うわあ!」

「歩美ちゃん!」

「小嶋君!」

「元太!歩美!」

当たったのは、歩美と元太だった。

「当たっちゃったな・・・」

「コナン君・・・絶対に私たちを生き返らせてね!」

歩美と元太は、黒い穴に落ちていった。

「まだだ・・・許さねえ!!」

「いい加減にしろ！良太郎！！」

良太郎の勢いは止まらなかった。

次々と1年B組の皆を当てていく。

コナンも、とうとう我慢の限界だった。

「いい加減にしろよ、良太郎！！」

そう言うとコナンは良太郎に近づいた。そして・・・

パチンッ！！

良太郎の頬ほおを叩いた。

「なっ・・・！！」

「いい加減にしろ、良太郎！！そんなことやって、井上が戻ってく

るのか?!井上はそんなこと、望んでないと思っぜ?!」

「・・・ごめん・・・コナン・・・」

良太郎は、ポトン・・・とボールを落とした。

ボールはコナンの目の前で止まった。

「このボールで俺を当ててくれ、コナン!」

「え・・・?!」

「怜子のところに行きたいんだ!頼む!!」

コナンは、良太郎を当てることができなかった。

「フッ、いいさ。コート外に出れば死ねるんだ!!」

「やめろ、良太郎!!」

良太郎は皆の声を無視して、コート線のところに立った。

「やめろお!!」

そして良太郎の足は、コート外の土を踏んだ・・・

ザンッ!!!

鈍い音がした。

良太郎は倒れた。

しかし、何かおかしい。

それにいち早く気づいたのは、赤井だった。

「か、顔がない!!」

「あっ・・・!まさか、阿呪!!」

コナンの言葉で、皆は一斉に阿呪を見た。

阿呪の手には・・・良太郎の顔が握られてた。

「きゃあー!!」

「あなたたちも出ればこうなるわ・・・1年A組、ふるいりょうたろう古井良太郎、死
亡。」

「そ、そんな・・・」

ピピーー!!

「試合終了。この勝負、引き分け。」

「引き分けだったらどうするんだ?!」

コナンの質問は尤もだ。もつと

「ジャンケンで決める。代表者を選びなさい。」

「俺が行く。」

「赤石さん・・・がんばって!!」

「ああ。負けるわけにはいかん。」

そして、それぞれの代表者が決まった。

「ジャンケンポン!」

1年A組の代表者はグー。

赤井は・・・パーだった。

「勝った!」

「勝者、1年B組。」

「生き返らせてね、皆!!」

「任せろ！」

相手のコートに大きな穴ができ、血があふれ出た。

「次は最終決戦よ。明日、始めるわ。ウフフ……。」

阿呪はスツと消えた。

「明日……だな。」

「がんばらないとね!!」

「でも……たくさんの犠牲者が出たわね。今いる人数を数えて、メモしておきましょう。」

皆は、哀の意見に賛成だ。

「えつと……少ないわね。たったの15人よ。最初は3人いたわ。」

「少ないですね・・・でも、コナン君達が生き返らせてくれるはず
です！犠牲者の願いを叶えてあげましょう！！」

「ああ！絶対に皆を・・・生き返らせてやる！！」

「犠牲者の願いを叶えんわけにはいかん。たった1つの願いをな・・・」

そう。犠牲者の願いは、一つ。

『死んだ私たちを生き返らせて。皆に会わせて！』

この願いを・・・必ず叶えてやりたい。

それが皆の思いだった。

「がんばろう！皆も分も！なっ？」

「分かってるわ！コナン君もがんばって！！赤石さんも！」

「ああ！」

「うん！」

そう返事するコナンだが、本当は不安でいっぱいだった。

「（だが、もし、明日の試合で負けてしまったら・・・きっと阿呪も他の罫を張るはず・・・その時はどうする？どうしよう・・・あーくそっ！分からねえ！！）」

コナンが考えていることを読んだか否か赤井が声いをかけた。

「ボウヤ。深く考えるな。阿呪もそれが狙いかもしれん。その時はその時だ。」

「あっ・・・うん！」

とりあえず、皆は家に帰ることにした。

明日は最終決戦・・・

果たしてコナン達は、死んだ皆を生き返らせることができるのか？

第6話 犠牲者の願い・・・（後書き）

おかしな題名ですか・・・ね？

おかしかったら、メッセージに書いて送ってくださいね。

お願いします。

最終話 生き返れた皆。ドッジボールは楽しい

次の日。

皆は学校に集まった。

「絶対に勝ちましょう、皆！」

「分かってる！頑張ってるね、赤石さん、コナン君！」

「ああ、まかせろー！」

「最後にエンジン組もうぜ！」

「よしっ！……絶対優勝するぞ！」

『おおー！ー！』

皆は2回目の一致団結。

はたして、コナン達は優勝することができるのだろうか？

「行くぜ！！」

コナンの声が出た瞬間。パツと皆は走っていった。

「ウフフ……さあ運命の最終決戦……はじめ。」

阿呪が冷酷に笑い、しゃべった瞬間。

コートが半分に割れた。

「思った通りだわ！」

哀の思ったとおりだった。

チームは、赤井、コナンチームと、残りの皆全員のチームとで分かれた。

「赤石さん、頑張つて。」

「あ、ああ・・・」

赤井は不安だった。

もし、優勝したとしても、生き返らせてくれるのだろうか？

それが一番不安だった。

「早く!!」

「はっ！」

赤井が投げたボールは、ジェイムズに当たった。

「ジェイムズ・・・すまない。」

「いや、頼んだぞ!!」

ジェイムズは、穴に落ちていった。

おびただ
夥しい程の血があふれ出た。

「はっ！」

コナンと赤井は、ドンドン当てていく。

そして・・・

ピピ―！！

笛が鳴り響いた。

「勝者・・・赤石龍、江戸川コナンペア。優勝。」

阿呪の声が響く。

哀たちのコートに穴があいた。

「生き返らせてくれるよね、阿呪・・・」

蘭のこの言葉が最後だった。

皆は穴に落ちていった・・・

「さあ約束通り、死んだ皆を生き返らせてくれ！」

コナンの言葉に、阿呪はフンツと鼻で笑った。

「馬鹿じゃないの？生き返らせるわけないじゃない。」

「え．．．？」

「や、約束が違っじゃないか!!」

「ウフフ．．．信じたあなたたちが馬鹿だったのよ。もうあなたたちしか生き残っていないの。誰もいないわ。ウフフ．．．」

「そ、そんな．．．」

「馬鹿な．．．」

「そんな、そんな．．．な．．．」

コナンは、今にも気を失いそうだった。

しかし、必死に気を保っている。

「ジョディ先生達に．．．生き返らせてやるって言ったのに．．．」

そんな・・・」

「くっ・・・」

運動場には、もう二人の声しか響かなかった。

もう、友達の声も聞こえない。

遊ぶこともできない。

蘭にも、会えない・・・

蘭の親に、なんて言えばいいのだろうか？

コナンは、ただただ、それを考えるしかなかった・・・

泣きながら・・・必死に考えても、思いつかない。

なぜ、こんなことになってしまったのだろうか？

なぜ、自分たちなのだろう？

なぜ、この学校になってしまったのだろうか？

なぜ、なぜ・・・

コナンは、ひゃっくりをあげながら、ただただ、その場に立ちすくむことしかできなかった。

阿呪は、コナンの考えを読んだか否か、^{いな}しゃべりかけた。

「・・・コナン、あなたがこのゲームを招いたのよ。」

「え・・・？」

「覚えてる？覚えてるわけないわね。今、記憶を戻してあげる・・・」

そう言うと、阿呪はコナンの前に立ち、コナンの頭に手を置いた。

「はっ・・・！！お前は・・・あの時の・・・」

「ええ、あなたがまだ子供のころ・・・あなたが覚えているであろう、あの踏切で、事故があったでしょう？それを招いたのは・・・あなたなのよ。その被害者があたし。あなたは、友達と鬼ごっこをしていた・・・そしてその踏切にさしかかった。あなたはあたしにぶつかったのよ。急なことであたしはバランスを崩し、線路に倒れてしまった・・・そのまま電車が通過して、あたしは即死・・・死んでしまったわ。あたしは結婚を控えていた・・・あたしの命日が、あたしの結婚式の当日でもあったのよ・・・あなたは突然のことに記憶を失い、自らその記憶を閉ざしてしまった。あたしはあなたに復讐するためにこの世に残った・・・分かった？あなたの友達や知り合いが死んだのは・・・あなたが招いたのよ！」

コナンの体は、ガタガタと震えた。

まさか自分のせいだったただなんて・・・

「待ってくれ！」

赤井が声を張り上げた。

「確かにボウヤのせいだったかもしれない。だが、どうしてそこまでそんなことに根をもつ？聞いた話では、死んだ魂はいつか、生まれ変わることができるらしいじゃないか。もう1度、人生をやり直

そうとは思わないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

阿呪は黙って赤井の言葉を聞いている。

「死んでしまったものは皆、生き返らせてくれることを望んでいる。お前は生き返られなくても・・・・生まれ変わることはできる。そうだろう？だから・・・・死んだ皆を生き返らせてくれ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

阿呪は黙って考えると、そつと顔をあげた。

「・・・・・・・・分かったわ・・・・生き返らせてあげる・・・・」

その言葉に、コナンも顔をあげた。

「ほ、本当か・・・・？」

「・・・・・・・・ええ・・・・行くわよ・・・・タイム・リターン・エクセレン

ト！」

阿呪が唱えた瞬間。

周りがパアツと光った。

まぶしいほど。

その中で、阿呪は二人に聞こえるような声で言った。

『ありがとう・・・生まれ変わったとき、会えたらいいわね・・・』

そして数分後。

光が消えた。

コナンと赤井の周りには、死んだ皆がいた。

「じよ、ジョディ先生！皆！！」

「あたしたち、生き返ったのね・・・！」

「やったー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

皆は喜びの声を上げた。

その中で、小林先生がマイクを持ち、こういった。

「さあ皆さん！今度のドッジボール大会は、1週間後にします！頑張って鍛えてくださいね！」

「おおー!!!」

そして皆は、1週間後のドッジボール大会に向けて、猛特訓を始めた。

男子は、弱い女子を教えてあげたりと、頑張っていた。

そして1週間後のドッジボール大会。

女子が強くなっており、男子は逃げ回るはめになってしまっていた

という・・・

そして女子全員の言葉が重なった。

『ドッジボールって、たっのしい!』

END

最終話 生き返れた皆。ドッジボールは楽しい（後書き）

最後に書いてあった『たっのしい!』というのは、

「楽しい!」

という意味です。

この方がいいかと思いましたので。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037e/>

‘死’のドッジボール

2010年10月10日13時02分発行